様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　５ 月 ２５ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０２６１６

研究課題名（和文）18世紀ドイツの印刷メディアのなかの自死　自死を受容する社会と読者の文化史研究

研究課題名（英文）Suicide in the bibliographic historical context of Germany in the 18th century

研究代表者
吉田　耕太郎（YOSHIDA, KOTARO）

大阪大学・文学研究科・准教授

研究者番号：４０５５１９３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、若者の自死をめぐる18世紀ドイツの言説の歴史を検討した。ウェルテル効果と呼ばれるこの現象は、主人公が自死で幕をとじるゲーテの小説『若きウェルテルの悩み』に影響を受けた若者たちが自死に共感した現象である。本研究は、若者の自死についての社会調査ではなく、自死がメディアによって流布し受けいれられるようになった、メディアの介在した文化現象の検討であった。研究で明らかにしたのは、若者の自死という行為そのものへの着目ではなく、病という視点からとらえる必要である。なかでも非専門家を対象とした医学言説の流布により、若者たちは自分たちを死へと向かう病んだ存在として表象するようになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
18世紀ドイツを対象とする本研究は、現代日本の若者の自死の問題に直接コミットできるアクチュアルな性格はもってはいない。しかし本研究は、自死を決行するないしは自死を求めるというメンタリティーもまた、社会的に構築された価値観のひとつであることをあらためて確認することができた。それゆえ、同時代のウェルテル批判の主要な方法の一つが、ウェルテルの物語を書きかえるという方法であった。ライフストーリーを描く可能性のない社会や教育、希望的なストーリーを描くことの不可能にする実社会の社会経済的な格差というものは従来批判されているが、自らの人生を物語る詩的能力の育成も重要であることを本研究から主張できる。

研究成果の概要（英文）：This study examined the history of 18th century German discourse on youth suicide.This phenomenon, now known as the Werther effect, refers to the fact that young people influenced by Goethe's novel "Die Leiden des jungen Werthers" in which the main character ends up committing suicide, sympathize with the main character.In this study, I did not conduct a historical social survey of suicide among young people, but rather examined a cultural phenomenon in which the choice of suicide was spread and accepted by the media. What has become clear in this research is that we need to look at suicide from the perspective of illness. By looking from this perspective, it is possible to understand the mentality and social values that lead people to seek suicide rather than the young people who commit it. And hhe dissemination of medical discourse aimed at non-specialists has enabled young people to represent themselves as sick.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：ドイツ　文化史　１８世紀　自死　世代問題　病　自殺　ドイツ文学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究課題を構想する上で問題としてとりあげたのが、１８世紀ドイツの若者たちの自死であった。つまり、なぜ１８世紀の若者が自らの人生の終わりとして自死を選ぶようになったのかという問いである。ドイツ文学史研究のなかでも、ゲーテの小説『若きウェルテルの悩み』（１７７４）の出版を契機として、自死する主人公ウェルテルに共感した若者が現れ、ウェルテルの衣服を真似るばかりか、自死まで犯す若者が各地に現われたことを伝える報告が残されている。こうした社会現象は、現在では「ウェルテル熱」や「ウェルテル現象」と名付けられているが、本研究は、自死という社会現象に、『ウェルテル』をはじめとする文芸作品の受容という側面からアプローチするものである。つまり、なぜ１８世紀の読者たる若年層は自死する主人公に共感しうるようになったのか、この共感を可能にした社会的な状況、そして人生の終え方としての自死がもっていた同時代の文化的な意味を明らかにしようというのが、本研究を構想するにいたった背景であった。

２．研究の目的

本研究は、１８世紀ヨーロッパとりわけドイツにおける自死を研究するために、若者を自死へとむかわせた個人の特定の原因または個人をとりまいていた個別の社会状況を直接扱うのではなく、印刷メディアという視点からアプローチを試みることを当初から計画していた。というのも、自死をとりまく社会状況ならびに自死の持っていた文化史意味の解明に重点をおいていたからである。この時代、自死をモチーフとする文芸作品が出版されていた。こうした作品が創作され受容されるためには、「自死という人生の終わり方もあり得る」という価値観が成立していなければならない。こうした価値観が成立する背景を、神学、哲学、医学といった言説、多数出版されていた自死報告、書評誌を手がかりに解明することをめざした。

３．研究の方法

こうした研究構想を実行にうつすために、本研究では、印刷メディアの影響力と読者をとりまく文化的背景のふたつの観点から明らかにしようとこころみた。とはいえ、歴史的に伝えられているウェルテル熱が実際にどのようなものであったのかを、実証的に研究することも不可欠である。そのために本研究では、主に先行研究を活用して、１８世紀当時の自死の歴史的な調査をおこなう。そのために、当時、各都市で発刊されていた雑誌等に掲載されているニュースなどの歴史的報告も部分的に調査する。

あわせて、ゲーテの『ウェルテル』と同時期の自死をあつかった文学作品も調査する。とりわけ自死のモチーフが多用された疾風怒涛期に分類される１７６０年から１７９０年の文芸作品を主な研究対象と位置づけているが、本研究では、作品そのものの分析ではなく、作品がどのように受容されたのかという点を重視するため、書評雑誌の記事の分析に比重をおくことになる。このような手法により、本研究では、自死をあつかった作品に対する反応という点から、自死というモチーフが当時どのように受容されていたのかという側面を明らかにすることを目指している。それと同時に、自死が受容されるための、文化的な条件として、若者たちがおかれていた思想的かつ文化的な条件についても、関連する歴史史料をつかってできる限り明らかにする。

４．研究成果

まず自死についての先行研究の整理と調査ならびに、自死をテーマとした文学作品の嚆矢とされるゲーテの『若きウエルテルの悩み』を主な分析対象としつつ、１８世紀ドイツの自死についての言説を日本またはオンライン等で入手できる範囲で収集し分析した。

１８世紀の自死を歴史的・実証的に明らかにしようとする研究も存在する。これらの研究成果を検討してみると、記録に残されている若者の自死の件数は予想以上に少なく、むしろ自死という人生の終わり方の異常性が耳目を集め、同時代の言説の中で反復されたということがわかった。キリスト教文化圏において自死は罪であったのだから当然ではある。このような調査の結果から、１８世紀の自死言説を分析する上で重要となるのは、自死という行為または自死という行為をおかしてしまった人物についての研究ではなく、自死という行為を受け入れるようなこの時代の価値観の変化、ないしは、実際に自死を犯すことはないものの、自死という人生の終わり方を、共感をもって受け入れた若者たちの価値観の成立のプロセスへと研究の比重をおく必要性も明らかになった。

２０１８年度には日本国内でおこなわれている自殺予防学のワーキンググループの会合に参加した。私は、ドイツの歴史的な自死の事例提供をおこなったわけだが、日本でも曾根崎心中のような文学作品を通じて流布した（愛人との）自死のタイプがあり、自殺の比較文化的な類型化というあらたな研究領域の可能性を知ることができたことは大きな収穫であった。

１８世紀ドイツの文芸作品によって、「可能性としての自死」が、若者たちに流布したことが明らかになった。この「自死の可能性」を、さらに研究するために、研究の枠組みの調整をおこなった。まず参考にしたのが、同時代の自死文学の受容の側面を確認するために調査してきた書評雑誌であった。書評雑誌での議論のタイプを整理してみることで、自死作品を読む若者を病んだ存在と論じる言説があることに気がつき、死の可能性を受け入れた若者を、病という枠組みでもって考察することに着手した。このような若者を病んだ存在とみなす当時の言説については、当時の流行病である心気症や感傷性（神経過敏）といった現象のうちに併置して考察する必要性もあきらかになり、このテーマについては、本研究以降に深める予定でいる。

２０１９年度および２０２０年度にわたって立命館大学、仙台大学の研究者をはじめとする身体文化の研究グループに参加し、そこで、１８世紀ヨーロッパにおける病・病人の記述についての研究発表をおこない、多くの有益な意見を得ることができた。また同年度期間には、病人や盲人の記述と流布というテーマでベルギー・ゲント大学およびドイツ・ハイデルベルク大学で開催された国際学会において成果を発表した。とりわけゲント大学での発表は、初期近代における日本ならびにヨーロッパの病・病人の記述について研究している研究者と意見交換することができた。病という概念をなりたたしめている文化的な背景についての知見を国際比較という観点をまじえて深めることができた。例えば健康と不健康、または身体の正常と異常という線引きは、時代時代に応じて変化してきたことはいうまでもないことだが、若者の自死という社会現象にも、おなじように、社会からのステレオタイプのあてはめという、若者をとりまく環境からのバイアスが、強くはたらいていたことを確認することができた。

このような若者の病と平行して、若者たちがおかれている状況についてもより具体的に明らかにする必要性がでてきた。そのために家庭という切り口から、１８世紀の未婚の男女の生活環境を問う研究をおこなった。家庭というテーマの研究を進める上で、はばひろい専門的な知見を得るために、都立大学、慶応大学、大阪市立大学、京都女子大学の研究者とともに定期的な研究会を開催することになった。研究会はドイツという地域に限定して、文学作品に描かれた家庭像の歴史的な変遷をたどるものであったが、伝統的な結婚理解から１８世紀前半の啓蒙思想の影響を受けての教育思想の形成のなかで、家庭という人間関係という視点からみた、若者のおかれた社会的な位置についての研究を深めた。この家庭についての研究の成果として、２０２０年度に国内にてシンポジウムを企画、また家庭関係における感情の働きについても論文としてまとめている。

とりわけ教育思想との関係では、神童の表象の時代的な変遷についての研究をまとめた。本研究課題がターゲットにしている１８世紀後半の神童とはまさに病の符丁として機能していたことを論じている。教育思想が成熟し、制度としての教育が整備されることによって、この教育のレールに上手くのれない若者は健全ではない状態として語られることになった。このような１８世紀のドイツにおける若者の価値観を形成する上で、非専門家向けに出版された医学的言説の役割の大きさについても調査をおこなった。自死の決行、自死という人生の終わりの可能性を見いだすことをふくめて、１８世紀の若者は病んでいるという自己規定を外から与えられると同時に、自らも受け入れることになった。この時代の家庭環境や整備されつつあった教育制度とのなかで自らの居場所を見いだせない若者は、（実際に自死をしないものの）自死を受け入れるという態度をとることによって、自らを病んだ存在としての居場所を確保するしかなかったのではないかと、現段階では考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 吉田耕太郎	４．巻 16
２．論文標題 18世紀ドイツの旅行記・地理誌とその受容	５．発行年 2019年
３．雑誌名 啓蒙主義研究	６．最初と最後の頁 47-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉田耕太郎	４．巻 15
２．論文標題 嬰児殺しをめぐる言説の再検討 Ⅰ 論争の背景	５．発行年 2018年
３．雑誌名 啓蒙主義研究	６．最初と最後の頁 17-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉田耕太郎	４．巻 14
２．論文標題 18世紀の自死をめぐる言説の再検討 Ⅰ	５．発行年 2017年
３．雑誌名 ドイツ啓蒙主義研究	６．最初と最後の頁 41-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉田耕太郎	４．巻 58
２．論文標題 社交熱と孤独：ヨーハン・ゲオルク・ツィマーマン『孤独論』の再検討	５．発行年 2017年
３．雑誌名 大阪大学文学研究科紀要	６．最初と最後の頁 141-163
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 吉田耕太郎
2．発表標題 18世紀の結婚・家庭と感情の問題について
3．学会等名 身体文化研究会
4．発表年 2019年

1．発表者名 Kotaro YOSHIDA
2．発表標題 Blind people in the Edo period and Transcultural Alteration of this information
3．学会等名 Transcultural Encounters（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 吉田耕太郎
2．発表標題 Identity and Writing - from a Travel diary of the Eighteenth Century
3．学会等名 HeKKSaGOn Workshop on Migration: Multicultural Identities and Social Change（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 吉田耕太郎
2．発表標題 Bettler, Eremiten oder Kuenstler
3．学会等名 Japanese body culture and sport in textual and visual representations.（国際学会）
4．発表年 2018年

１．発表者名 吉田耕太郎
２．発表標題 ヨーロッパに伝えられた日本人の身体－18世紀前後の旅行記を例に
３．学会等名 大阪大学ドイツ文学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 吉田耕太郎
２．発表標題 親密さを表現する：書簡文化からみた１８世紀の人間関係
３．学会等名 日本独文学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 吉田耕太郎
２．発表標題 感情と家庭 - そのバリエーションと社会的背景の再考
３．学会等名 日本独文学会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関